

## 特集 視覚障害者と就労

今回、視覚障害者と就労について多角的にスポットを当ててみました。特集1、「社会福祉法人日本ライトハウス」では、視覚障害者の就労訓練の現状をお伝えします。特集2の「ぎらぎらやる気—チャンスを掴め！」では、社長を始め社員が視覚障害者のコンピュータ機器販売会社、(株)テクノ・メイトをご紹介します。いつもは単独のコーナーの「人クローズアップ」は、今回、特集3として、視覚障害で公務員の三上さんにご登場いただきました。

### 特集1 社会福祉法人日本ライトハウス

#### 「視覚障害者リハビリテーションセンター」情報処理科を訪ねて

竹中 ナミ

日本ライトハウスは、大学在学中に失明した故岩橋武夫氏が点字資料の不足を痛感し、大正11年自ら点字図書製作に着手したことに端を発し、英国の盲人社会立法などを研究した氏によって昭和10年大阪市阿倍野区に建設されました。

昭和27年社会福祉法人認可、35年に現在の所在地である大阪市鶴見区に移転、昭和40(1965)年には日本で初めての”視覚障害者リハビリテーション”事業として「職業・生活訓練センター」を開設しました。

歩行練習や点字・カナタイプなどのコミュニケーション訓練、身辺処理や調理などの日常生活動作訓練にはじまる、いわゆる社会適応訓練と、さらにこれまで視覚障害者の伝統的な仕事であった按摩・鍼・灸(いわゆる三療)以外の職種の開発にも取り組み、NC工作機械工、プレス工、電話交換手、コンピュータプログラマー等を養成して、一般企業な



〈ライトハウスで使われている

UNIXマシン〉

どに送り出しています。

また近年の障害の重度化・重複化に伴い、知的障害や全身病・脳損傷を併せ持つ人たちの生活訓練も本年度より開始されました。

職業訓練部には、労働省所轄の「身体障害者等能力開発訓練事業」を大阪障害者職業訓練校より特別委託を受けて「構内電話交換科」「機械科」「情報処理科」が設けられ、職安を通じて入所した若者たちが就労を目指して学んでいます。

今回は、この「情報処理科」を訪問し、担当の津田諭(サト)教諭と訓練生の皆さんから「就労」をテーマにお話を伺いました。

まずは生徒さんから自己紹介を含めて一言づつ・・・

**川西さん** 「32才。大和総研の研究開発部に昨年9月まで在職。眼と内臓が悪化し、所沢のリハビリセンターで訓練を受けた後、ライトハウスへ入所。先天性の視力障害のため高卒の頃から拡大鏡付の学習機を使用。ライトハウスでコンピュータを学び、証券関係の職種への復帰を希望」との事。

**月見さん** 「コンピュータの勉強はライトハウスに来て初めて。20才。去年までは浪人生でした」と、にっこり。「チャンスを掴みたい」

**辻本さん** 「訓練生活1年半。寮を出て今は通学生。プログラマーとして企業就職が内定。その会社は視力障害者のプログラマーの雇用が始めてなので、どこまで実力を伸ばせるかチャレンジ。3年後にはSEに成長する事、というのが入社条件なので、厳しい。」と言いながら「熱い想いを秘めてるボクです」と、自己アピールはバッチリの20才。

**星野さん** 「新入生。27才、愛知県出身のため入寮して勉強中。2年前に交通事故で失明。点字はまだ充分使いこなせないけど、生活訓練を受けながら寮生活は順調」との事。以前在職していた研究開発関連の仕事への再就職が目標。

**吉村さん** 「23才。情報処理科入学は今年1月。緻密な作業が大好きだけど、プログラミング演習の課題の整理はたいへんだー」と明るく。

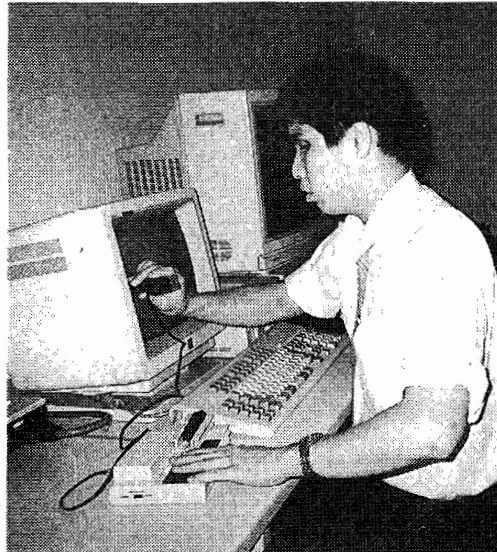
**館沢さん** とても「昨日、情報処理科へ入学したばかり」には見えない22才。コンピュータに興味はあるけど大好きなのは音楽。府立盲学校の音楽科でフルートを習ったのが病みつきで、友人とバンドを組んで活躍中とか。クラシックからポップス、ジャズまで「何でもあり！」との事。腕前のほどは新入生歓迎会ですすでにお披露目済み。

**三浦さん** 「コンピュータの勉強が好き」な体育系。がっしりした体格は、なんと柔道（講道館）3段の黒帯所持者。京都出身、24才。

「ワープロやコンピュータが視力障害者の武器として進出してきたので、今後の技術革新に期待大です」との事。特にCD-ROMで辞書をひくのが簡単になった事は嬉しい、と。

訓練生の皆さんをぐるっと見渡して、あらら、男性ばかり・・・と思いきや、欠席の一人が実は女性とか。でもやはりこの部門は男性が多いようです。ライトハウスの中でも電話交換手の部門などは、圧倒的に女性中心でしたが、やはり職種による男女差はあるようです。

視力障害者と情報処理系の就労に関しては、まだまだその可能性が社会的に知られていないため、就職活動の困難さは非常なものとか。



<オプタコンを使って画面を読みとる>

担当の津田教諭にお伺いしました。

**津田教諭** 企業は最初からSE（システムエンジニア）が欲しい、と言われます。でもSEというのは、本来現場でプログラマーを10年位やった人が、会社のシステムを総合的に把握した上で就く職種です。ですから、どうか先ずプログラマーとして雇用し、経験をさせてやって欲しい。そしてSEに育てて下さい、と企業にお願いしています。卒業生でSE的な仕事をしている者もいますが、視力障害者にSEが適しているのかどうかの答は、まだ出ていません。

**竹中** どの様な職場が彼らに適していると、お考えですか？

**津田教諭** 視力障害者がプログラマーとしての仕事をし易い職場は、銀行や大手スーパー、証券関係、大きな問屋さんなど自社でシステム開発の部門を持っている所ですね。視力障害者は印刷や画面処理には不適なので、ファイルの処理などシステムの根幹に関わる部署で、スタッフが多く、仕事の分担ができるような所なら最適です。でも不況風が吹き始めていますし、展望が明るいとは言えません。

**竹中** ライトハウスで学んだからといって、就労への道が保障される訳ではない・・・という事でしょうか？

**津田教諭** 人間の情報源の内、視覚によるものがその8割をしめる、と言われてます。視覚に障害を持つというのは、やはり大変なハンディなのです。コンピュータを選ぶのも、社会参加の機会の拡大、職域の拡大を目指すからであって、視力障害者がプログラマーに向いているという訳では決してありません。情報処理科、約20年の歴史の中でまだ40数名の卒業生しか出していません。卒業生の就職先を見つけるため毎年20~100の企業をまわるのが現実です。就職の保障は何も無い。。。と言っても過言ではありません。

津田教諭の厳しい言葉は視力障害者だけでなく、全ての障害者に当てはまります。どんな勉強をしても、就職の保障は何も無い。。。この様な現実の前でアップ・ステーションの役割は？「FLANKER」の役割は・・・？

津田教諭の言葉は続きます。

**津田教諭** 私たちの仕事は教える事だけではありません。どれだけの企業と、彼らの橋渡しができるか、そちらの方が重要です。授業の内容も、企業のニーズに合わせて柔軟に変更できるよう工夫しています。UNIXなどの導入も、企業ニーズに応えるためです。仕事が人生の全てではありませんが、仕事をしたという想いは尊いものだと思います。ただ現実が厳しいので、障害を持たない人以上の努力が必要という面があります。パイオニアの意気込みで頑張ってくれる事を、彼らに望みます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

編集委員の亀山くん（全盲）と共に訪れたライトハウス。

職安を通じて人所する訓練所であるにもかかわらず、卒業後の就職に明るい見通しが全くないという現状に、改めて「ファイトいっばーっ！！」

不況とはいえ、これだけの豊かな経済大国日本で、「働きたい」という人の意欲を「障害を持つ」との理由だけで萎えさせてしまうなんて、これは国家的損失やないやろかねえ。

そーいえば、かめちゃんも会社訪問すでに100近し。プログラマーとしての技術はかなりなもので、容姿も結構端麗(!?)。ナミねえ（あ、私の事）相手にしゃべる時は「おまえなあ」とくるけど、よそ様の前では、それはもう「会社訪問マニュアル」もびっくりするほど。

白杖ついてるだけで門前払いの企業が多いようやけど、かめちゃんの行動的な事というたら、ナミねえに言わせたら「突撃レポーター・タイプ」です。

今回取材させて戴いた訓練生の中にも、バンド組んでる人、講道館の黒帯なんて人も居て、ナミねえは「FLANKER」の役割がだんだん見えて来たよーな気がしてます。

「こんな人がここに居るよー！」という情報を、読者の皆さんぜひ、お寄せ下さい。もちろん「自分自身の売り込み」もOKよっ。

と、表題に反して最後が軽いノリみたいやけど、関西人の本音はやっぱり関西弁やないと・・・熱いもんが伝わらんよーな気がする。

読者の皆様も、方言大歓迎です。

最後になりましたが、お忙しい中お話を聞かせて下さった津田先生、訓練生の皆さん本当にありがとうございました。



<情報処理科の皆さん>

<（立っている人が津田教諭、その右が編集委員の亀山）>